

CONTENTS

尾道の祭り風土記 ～しまなみ編概説～ …… 1 頁
尾道の祭り風土記 ～しまなみ編～ …… 2 - 3 頁
因島の御烏喰神事～八重子島祭～ …… 4 頁



瀬戸田町・生口神社の祇園祭。神輿流しを終えて海から神輿を上げる際の記念写真。昭和5年(1930)。尾道市蔵

前号(第10号)の「まちなみ編」に続く「しまなみ編」として、向島・岩子島・百島・因島・生口島・高根島の島嶼部の内から多様な祭礼文化をご紹介します。

島嶼部に見る祭礼では、宮島を本家とする「管絃祭」の分布が多く、本宮社の厳島神社に倣って、船で海上を巡幸する形式(船渡御)が特色として見られます。

岩子島の管絃祭にあつては、厳島神とは別の海神(詳細不明)を祀る大鯨島へ御座船で詣でるのが慣わしで、その由来については詳らかではないようですが、複合する信仰の形を見ます。

同様に島渡りの神事で複合的な要素が窺われるものには、因島中庄町・熊箇原八幡神社の秋祭り初日に見る、八重子島(大浜沖の無人島)へ渡つての「八重子島祭」があり、八幡神の祭礼ながら、そこでは厳島神社に見る「御烏喰神事」の形を伝承しています(裏面参照)。

海を印象づける祭りの形では、神輿が海に入る海中渡御も島に多く、瀬戸田町・生口神社の祭礼(祇園祭)では、その昔は海へ入るのが常でした。ここでは海中で神輿を回す「神輿流し」が見られ、ある時には潮に流され、佐木島まで神輿が流れたという伝説的逸話も聞かれます。

因島・生口島方面では、祭礼の折に神輿と共に「だんじり」が繰り出す所が多く、「ふとんだんじり」が盛んな伊予方面の祭礼文化との交わりがそこに指摘されます。

これ以外にも島嶼部の祭礼文化は豊かに広がっており、ここにピックアップしたものはあくまでもほんの一部に過ぎません。

やまなみ・まちなみ・しまなみのシリーズ全編を通して、各地域の多様な祭礼文化を改めて見つめ直す機会になれば幸いです。

【向島】兼吉のどんど

一月中頃に行われる小正月の
とんど行事は各地に見られるが、
兼吉地区では、江戸時代に当地
の氏神・亀森八幡宮の神主が京
都で祭事を習得して、京都風な
とんどで再興したとの縁起を伝
える歴史あるとんど（神明祭）。
昭和三十年代の初め頃までは、
兼吉、田尻、富浜地区から数基
のとんどが繰り出し、八幡神社
境内で鉦・太鼓のお囃子にのっ
て勇壮にとんどをぶつけ合う「け
んかとんど」で知られた。
今日では一基のとんどが台車
に曳かれて町内を巡行する。



向島兼吉のとんど（昭和30年代・土本壽美撮影）

【向東】オハケ神儀（鎮護祭）

近畿から北陸、中四国にかけ
て分布するオハケ神儀は、古い
神儀の形を今に伝えるもので、
芸備地方にあつては中世の終わ
り頃にまで遡る事が確認される。
向東八幡神社では、秋の例大
祭前にその場が整えられ、神の
降臨を仰いで厄除け・五穀豊穡
が祈願されるが、平土器等を用
いた神占いが見られるのが特色
で、大祭当日に解かれたオハケ
から、一年の吉凶が占われる。
向島の亀森八幡では、「オハキ」
の名称で同様に行われる。



向東八幡神社祭礼でのオハケ神儀

【岩子島】管絃祭

宮島の管絃祭に倣い、かつて
は旧暦の六月十七日に行われて
いたが現在は七月下旬に行う。
提灯で飾られた御座船に御神
体となる天びんが乗せられ、か
がり火を焚いた柴燈木船、随行
船と共に厳島神社沖へ出ると、
木原沖に浮かぶ大鯨島へ向かう。
島へ上陸すると頂上部の石祠
（鯨島神社）へ詣で、お神酒を供
えて篠笛のお囃子を奏で、海上
安全と隆盛が祈られる。
この後、船団は厳島神社沖を
周回し、提灯とかがり火が闇夜
に浮かぶ幽玄な風景を見せる。



岩子島厳島神社管絃祭の御座船

【百島】お弓神事

嘉吉の乱に敗れた赤松氏の一
族が百島へ落ち延び、追手に備
えて弓の稽古をしたのに始まる
との由来を伝える。
百島八幡神社の年始（昔は一
月十一日、現在は一月第三日曜
日）の神事で、一年の豊年と災
厄除けを祈念して、袴姿の十五
人の射手が横一列に並び、太鼓
の合図で十五m先の的をめがけ
順に矢を放つ。

見事的な射貫くと太鼓が連打
され、歓声に沸き立つ。



昭和40年のお弓神事（旧市史編さん室撮影）

【因島】大浜神明祭

かつては旧暦一月十五日の小
正月に行われたが、現在は二月
の第一日曜日に行われる大浜伝
統の冬の歳時記。

その昔は浜辺で担がれていた
が、後に大浜小学校が祭場とな
り、次いで大浜公民館へ移って
今に至る。

町内の三つの組内組織から、
伊勢音頭と太鼓の音にのって繰
り出したとんど三基は、公民館
のグラウンドへ集結すると勇壮
に担ぎ合い、時に二基の担ぎ棒
を重ね合わせる「けんかとんど」
の光景が見られる。



大浜神明祭での勇壮なとんど神輿

【因島】曳舟神事

十月第三日曜日（昔は旧暦十
月十五日（よどぎ））に行われる
因島土生町の大山神社の例大祭
に見られる特殊神事。

丘陵上にある神社境内へ舟を
曳き上げるもので、参道石段を
勇壮に曳かれて上がる様は圧巻。
神社の前はかつて入り江で、

江戸時代に氏子の漁師達が樽漕
ぎ舟で速さを競い、勝者の舟を
神社まで曳き上げた故事が神事
の起源とされている。
境内での神輿とだんじりの競
演も見所。



大山神社祭礼に見る曳舟神事

【生口島】名荷神楽

昔は旧暦三月三日、現在は四
月第一日曜日に舞われる名荷神
楽は、名荷神社境内社の生石神
社（荒神社とも）の例祭に奉納
される。

その起源は室町時代に生口島
で疫病が流行し、加えて早魘に
よる凶作が重なったため、神社
の世話人が幣と扇子を手に神前
で神楽を舞い、疫病退散と豊作
を祈願した事に由来する。

演目の中では神のお告げを同
う人形を用いた舞があり、参列
者が締めで人形へお神酒を飲ま
せると、その顔はたちまちに赤
く染まる。



参列者が人形にお神酒を飲ませる光景

【高根島】ホーランエンヤ

高根島の厳島神社で行われる
管絃祭では、大鳥居の形に飾ら
れた「おかげん船」（親船）が、
曳き船と共に太鼓と鉦のお囃子
にのって繰り出し、高根島と生
口島（瀬戸田港側）の間の瀬戸
田水道を往來する。

ホーランエンヤの名は、親船
側の奉仕人から発せられる「ホー
エンヤ」の掛け声と、曳き船側
がこれに応えて発する「ホーラ
ンエー、ヨイヤサノサツサ」と
いう掛け声に因む。
夜になると大鳥居の提灯が灯
り、ここでも幻想的な管絃祭の
情景が浮かび上がる。



瀬戸田水道をゆくホーランエンヤの光景

新尾道市史

お待ちせしました！

『新尾道市史』第二弾！

『資料編 近世』刊行しました！

史料四六〇点を所収！

資料編

〔近世〕

『資料編 近世』の編集について

本巻は『新尾道市史』の近世資料編として、尾道市域に関する様々な分野の近世文書を収録しています。本巻の編集にあたっては、過去に本市で公開された市史や町史の内容を踏まえ、以下の三点に留意しました。

一点目は、なるべく多くの新出資料を収録するように留意しました。

二点目は、合併した旧市町域に関する文書の収録に留意しました。

三点目は、掲載資料の内容面でのバランスに留意しました。

本巻では、政治・経済・社会・生活文化・宗教など、様々な分野に関する文書を意識的に収録し、近世の尾道町や農村・島嶼部に生きる人々の姿を多様な側面から幅広く捉えるように努めました。

第一章から十三章の各テーマは、それぞれが相互に密接な関連性を有しています。

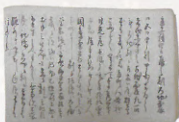
新尾道市史

資料編 近世

表紙の色は尾道市の「花」「木」の「桜」をイメージしています。

『新尾道市史 資料編 近世』 目次

第一章	近世前期の尾道町と村・浦	第四節	鉄産業
第二章	開発・工事	第五節	塩業
第三章	湊町尾道の町政	第六節	蘭草・畳表・花莫産
第四章	農山村の社会	第七節	漁師町と漁業
第五章	島嶼部の様相	第八節	問屋商業・金融の展開
第六章	交通・運輸・通信	第九節	銀談争論
第七章	藩政の展開と尾道	第十節	尾道の商人と商家経営
第八章	凶作・飢饉と災害	第十一節	海運と廻船
第九章	産業の発達と展開	第十二節	廻米御用
第一節	石造物・尾道石工	第十章	寺社・宗教
第二節	尾道酒	第十一章	思想・教育・文芸
第三節	尾道酢	第十二章	生活・文化
		第十三章	幕末維新の政情と尾道



『新尾道市史 資料編 近世』

A5版(830頁) 頒布価格:3,000円(税込・送料実費)

送料は実費負担です。お申し込み先にご確認ください。

販売先

尾道市文化振興課／尾道市史編さん委員会事務局／尾道市立中央図書館・尾道市立みつぎ子ども図書館「すくすく」・尾道市立因島図書館・尾道市立瀬戸田図書館・尾道市立向島子ども図書館「わくわく」(※図書館での販売は2023年3月まで)

お申し込み・お問い合わせ先

尾道市史編さん委員会事務局(企画財政部文化振興課内)

〒722-0022尾道市栗原町1268-1(旧尾道高校本館)

TEL(0848)38-9359(直通) FAX(0848)24-2131(直通) ※お電話での受付時間は平日8時30分～17時

お支払方法

尾道市発行の納付書でお支払いいただけます(ゆうちょ銀行以外の尾道市内に本支店のある金融機関で取り扱っています)。

因島の御烏喰神事おとぐい 八重子島祭やえごじま



岩場の突端に置かれた藁船



供物を乗せた藁船



八重子島への上陸

因島中庄町・熊笹原八幡神社の秋季大祭を前に、因島大浜町の沖合いに浮かぶ八重子島へ神職一行が渡る特殊神事が行われます。

神事は「御烏喰神事」ともされ、神の使いとしての鳥カラスに供物を献じる儀式になり、呼称に差異はあれど、宮島の厳島神社の他、全国各地に分布し、因島の内では因島重井町と因島田熊町にも確認されます。

まだ夜も明けきらない早朝、宮司と氏子役員が大浜の棧橋より船で渡り、岩場の上に注連縄を張った齋竹イハを立てた仮設の祭壇が組まれ、岩場の突先には餅・御神酒・甘酒・米・塩が乗せられた藁船わらぶねが据えられ、厳かに神事が行われます。

神事が終わって以降、島の上空に現れた鳥が供物をついばむ事になります。神秘的な光景に映ります。

八重子島での御烏喰神事の由来について、紀州熊野三山の神を島に迎えた事に始まり、熊野神の神使である鳥が熊笹原まで供物を運ぶとの故事を伝えるとされています。

『新尾道市史』刊行計画

市制施行一二〇周年にあたる平成三十年度(二〇一八)を振り出しに、令和十年(二〇二八)までの十一年計画で、新市域を網羅しての『新尾道市史』を編さんします。今後の刊行スケジュールは次の通りです。

令和四年度(二〇二二)

資料編 近世

令和五年度(二〇二三)

文化財編 下巻

資料編 考古・古代・中世

資料編 近代・現代

資料編 近代・現代

令和六年度(二〇二四)

地理編

令和七年度(二〇二五)

通史編 原始・古代・中世

令和八年度(二〇二六)

通史編 近世

令和九年度(二〇二七)

通史編 近代

令和十年(二〇二八)

通史編 現代

史資料や情報をお寄せください

古文書や古写真(写真絵葉書を含む)、古地図、尾道の話題を報じる古新聞など、市史編さん委員会事務局では、幅広い分野において尾道に関わる史資料を収集しています。また、無形の伝承(地域に伝わる言い伝えや独特な慣習、祭礼芸能等)についても収集対象となります。もし皆さんのお宅や周辺で、あるいは地域で、そうしたものが発見された場合は、事務局へご一報ください。史資料については複製(写真撮影・コピー)を取らせていただくのみで、現物については速やかにお返しさせていただきます。情報提供は下記の事務局連絡先までお願いします。お電話での受付時間は平日8:30~17:00です。(文化財係:0848-20-7425)

編集後記 * 2023.1

新年あけましておめでとうございます。

さて、この度は「市史広報」第9号から続いておりました「尾道の祭り風土記」のしまなみ編をお送りします。今回で最後となる本シリーズは、コロナ禍で縮小や中止を余儀なくされていたお祭りを特集しました。祭りの多い尾道の魅力を再発見することができましたでしょうか？

お待たせしておりました『新尾道市史』第二弾「資料編 近世」を刊行しました！購入方法等の詳細は折込チラシをご確認くださいませ。(I.M.)

※『市史広報』は年に2回程度の発行を予定しております。みなさんの様々なお声や情報をお待ちしております。